

■はじめに

今年も台風が発生する時季になりました。各学校園には避難所に指定されているところもあります。警報発令時には対策本部が立ち上がり、避難所開設の指示が出ることも考えられますので、よろしく対応方お願いします。



■新規採用教員との対談から



奈良市の教育について保護者に伝える目的で刊行している奈良市教育だより「きらめき☆奈良」は、創刊から3年目を迎えました。先日、第6号に掲載する企画で、本年度から奈良市立学校に着任した3名の新任の先生方と対談をしました。

募集した際、何名かの先生が積極的に手を挙げてくれました。背中を押して応募を勧めていただいた校長先生方に感謝しています。残念ながら選ばれなかった先生もいますが、自らの思いを語ろうと応募してくれたチャレンジ精神は素晴らしいです。これからも、その姿勢を忘れないでほしいと思います。対談は2時間を超えるボリュームでしたが、この対談を通じて、フレッシュなパワーを感じることができ、彼らとともに、深く議論を交わすことができました。「きらめき☆奈良」の紙面に掲載されているのはほんの一部ですので、そのときの様子と、私が彼らに伝えた思いを、もう少し詳しくお伝えしたいと思います。

今回の対談の参加者は、辰市小学校の吉田勇樹先生、飛鳥小学校の池見幸恵先生、富雄南中学校の中島令太先生の3人でした。

◇英語教育

まず、吉田先生が「英語教育が小学校から導入されますが、自分自身が経験していないことなので、不安があります」と切り出し、他の先生からも「試験で問われる英語は慣れているのですが、実際は、外国の方に道を聞かれるだけでも、ドキッとして後ろに引いてしまうので、教えるにあたり不安があります」との意見が出ました。さて、校 園 長 先生 方 は どう だ ろ う じ ゃ ない か。 実 は 私 も、 学 生 時 代 の 挫 折 感 を 引 き ず っ て お り、 外 国 の 方 の 前 に 立 つ と、 後 ろ に 引 い て し ま う と ころ が あ り ま す。 我 々 が 学 生 の こ ろ の 英 語 教 育 は、 特 に 「書 く」 こ と と 「読 む」 こ と が 重 視 さ れ、 「話 す」 こ と や 「聞 く」 こ と に は、 あ ま り な じ み が あ り ま せ ン。 だ か ら こ そ、 今 の 英 語 教 育 を 変 え て い く 必 要 が あ り ま す。「読 む」「書 く」 こ と を 大 切 に し な が ら、「話 す」「聞 く」 こ と に 積 極 的 に 取 り 組 ん で い か な け れ ば な り ま せ ン。 英 語 を 学 ぶ 時 間 は、 来 年 度 の 小 中 一 貫 教 育 の 全 市 展 開 と と も に、 小 学 校 1 年 生 か ら 始 め る 計 画 で す。 ま た、 増 員 し た ALT の 全 員 を あ る 日 一 つ の 学 校 に 集 め、 英 語 の 時



間はもとより、通常の授業、休み時間、給食、クラブ活動などを一緒に過ごすという、オールイングリッシュデイのような活動も考えています。ただし、子どもに流暢な英語を話すことを求めているのではなく、物怖じせずに外国の方とコミュニケーションがとれる子どもになってほしいということと、英語で話すこと自体が目的ではなく、何を話すかという中身が大切であるということをお忘れないうちに伝えました。

◇ICT



次に、ICTを生かした教育について、池見先生から、「大学で、フィンランドの教育実践を学び、テレビ会議システムを利用したコミュニケーションを学びました。学校には大きなテレビもあり、電子黒板もあります。これからは、子どもたちが、英語の正確な発音が聞けるようになればいいですね」と意見がだされました。他の先生からも、「方法や手段の一つとして、有効な活用は必要だと思います」、「地球儀をぐるぐる回すより、スマホやタブレットで実際に映像を見る方がリアルな見え方がします」などの発言がありました。特にこの分野においては、我々と若い先生の間で世代のギャップがあります。我々の経験やノウハウを伝えていながら、若い人がもつICTを活用する力を生かしていくことが大切です。子どもたちは、我々が想像している以上に変化の激しい時代、このようなICTが当たり前身近にある時代を生きていきます。先生方の授業や研修のありかたを工夫していかなければなりません。

◇公開授業

先週の7月3日に、済美小学校に行ってきました。タブレット端末を使ったICT教育モデル実証校の一つとして、今年度、最初に行われた研究授業でした。授業を担当したのは、3年目の若い先生でした。終わってからその先生に話を聞くと、「個々にまとめた内容を共有できるため、“見せたい”という意欲が高まり、創造力が培われています。また、いつもの授業だと、質問は先生である私にしてくるのですが、タブレットを使った授業だと、お互いに尋ねあったりしてコミュニケーションが深まる効果もみられました」と、ICT教育の利点を話してくれました。研究授業は、伝えたいことが多くあったため、チャイムが鳴っても終わらなかったのですが、子どもたちなりに気を配り一生懸命頑張っていました。先生と子どもが互いにとても良い関係を築いていると感じました。

また、参加されていた若い先生方は、自らがタブレットを持ち、写真や動画を撮ったり、メモを記録したり、子どもたちのグラフづくりを自らのタブレットで試したり、自在に活用しながらの参観でした。持ち帰ってこれから工夫していこうという意欲が感じられました。しかし、参加者のうちの40%が校長先生や教頭先生でした。教員は授業や校務などでなかなか抜けられないという声も聞きますが、このような機会には多くの若い先生方が参加できるよう、時間割変更などの配慮をして、若手の先生を研修



に出してあげる工夫を各学校でお願いします。

◇キャリア教育



次に、中島先生は奈良市の出身ではないそうですが、「自分の出身中学校の職場体験は、学年の全員が同じ施設に行ったので、幅広い選択肢がある奈良市の中学生は、いい経験をさせてもらっていると感じます」と話してくれました。私は新任の先生方の着任式で、「今は、学校の中だけで教育が完結する時代ではない。地域の人と接する機会をもって、地域の人から学ぶ機会をもってほしい」と話しましたので、逆に、「教育が学校の中だけでは完結しないのはなぜだと思うか」と尋ねました。すると、「社会に出ると、いろいろな人と関わっていかなければならないので、多くの経験を積む必要があるからではないでしょうか」と答えてくれました。続けて、「なぜ地域の人とかかわるのだろうか」という問いには、「学校は地域にあり、それらの地域が集まって奈良市となっていくので、奈良市全体で、子どもを育てていくことが大切になるからだと思います」と答えてくれました。新任の先生である彼らからこのような答えが聞けたことは、とても頼もしく思います。学校という社会の中だけで生活すると、内向きの、「井の中の蛙」状態になってしまいます。ぜひ、地域行事へ参加するなどして、どんどん地域と関係をもって行ってほしいとお願いしました。

◇教育戦略会議

奈良市では、本年度から教育戦略会議を開催して、教育の方向性について話し合う機会をもとと考えています。先日も、この戦略会議の委員をお願いしている方と話す機会がありました。私が「学校の先生は学校の中のことしか知らないですね」と言ったところ、「たしかにそうかもしれませんが、学校の先生だけが専門的で狭い世界を見ているわけではありません。例えば、トヨタは世界的な会社ですが、その社員は車をどう作るか、車をどう売るかという狭い世界の中で一生懸命試行錯誤しています。しかし、学校も会社も、経営者には、幅広い視野が必要になってきますね。10年後、15年後の子どもの姿を見通して、今何をするかが大切です」とのことでした。新任の先生方との対談でも、まとめとしてこのようなことを伝えるとともに、この1年のうちに「教員っておもしろいな」と感じる手ごたえを体験してほしいと伝えました。そしてもう一つ、子どもの後ろには、子どものことを愛しく大切に思っている保護者がいるということ意識しておいてほしいということも伝えました。

■企業経営の動向から

さて、先ほど「井の中の蛙にならない」という話をしましたが、このことについて、気になる新聞記事がありましたので紹介します。

ご存知の方も多いかと思いますが、明治32年創業以来、創業家の一族が経営のトップを担ってきた「サントリー」が、初めて、一族ではない代表取締役社長を外部から招へいし

ました。「サントリー」に招へいされたのは、三菱商事からコンビニエンスストアのローソンを建て直したことで有名な新浪剛史氏です。同様に昭和30年創業の企業で、教育とは強い結びつきがある「ベネッセホールディングス」も、代表取締役会長兼社長を、6月に外部から招へいしました。「ベネッセホールディングス」に入ったのは、アップルコンピュータ、日本マクドナルドホールディングスで経営手腕を発揮した経営者である原田泳幸氏です。孫正義氏が代表を務める「ソフトバンク」においても、社外取締役には、ファーストリテイリングスやユニクロ等の代表取締役会長を兼任する柳井正氏が名を連ねています。

なぜ、企業は外からの人材を求めめるのでしょうか。それは、生き残るために今あるものを単に継承する「たし算」ではなく、勝ち残っていくための「かけ算」ができる人材を外から呼んでくるためです。先日、鶴舞小学校で講演をいただいた、同校の卒業生でもある日本マイクロソフト社長の樋口泰行氏は、まさに「外から呼ばれる社長」の代表格といえます。

◇地域で決める学校予算事業

さて、これは企業の話なので、我々とは少し距離があると感じるかもしれませんが、私が言いたいことは、今、学校園で学んでいる子どもたちが、このような社会に出ていくということなのです。したがって、このような社会で生き抜くために求められる力として、探求する力、発想する力、挑戦する力、関わる力、提案する力、振り返りができる力、などが掲げられます。つまり、国際バカロレアにおいても提唱される考え方が、日本においてクローズアップされてくる背景に、グローバル化する社会があり、まさしくこのような力をつけることが求められているのです。

先ほど、企業が外からの人材を迎え入れていることに触れましたが、我々も、学校の中だけでは完結できない、つまり学校の外の人材を活用していかねばならないと感じます。奈良市には22中学校区の全てにおいて事業を展開している「学校支援地域本部事業」がありますので、これをしっかり活用する方法を考えなければなりません。右の

IV-1 ③就学前と小学校、中学校など“縦の連携”が生まれる仕組みづくり

中学校区の全ての子供を大人総動員で守り育てる仕組みづくり (奈良県奈良市)

取組の概要

◆平成20年度に学校支援地域本部事業を全市展開。平成22年度には奈良市独自の予算を加え、「地域で決める学校予算事業」を開始。各中学校区(22校区)に学校支援地域本部(地域教育協議会)を設置。地域全体で子供を育てる体制をつくり、子供たちの教育活動の充実を図るとともに、地域の教育力の再生と地域コミュニティの活性化をすすめている。

「地域で決める学校予算事業」

事業予算
総額8,000万円
(うち国補助1,100万円)
※校区の学校園数・幼児児童生徒数を基礎に予算を算出
※各地域教育協議会によるプレゼンテーションによる評価を加味、全22中学校区に配当
※学校や地域の実態に応じて、使い道が決められる予算
※1校区(150万円~650万円)

事業の推進の要は
コーディネーター育成
(研修を年6回開催)

地域教育協議会
各中学校区に設置

- ・地域既存の組織の長(おさ)が集まる組織となり、地域ネットワークが広がっている。地域のソーシャルキャピタル構築の場となっている。
- ・幼稚園、小学校で留まっていた地域のマンパワーが中学校区にも導入されるようになった。
- ・奈良市がすすめる小中一貫教育と連携しながら、地域の生の学校園づくりをすすめている。

校区によっては、学校と地域が育てたい子供像を共有し、運営協議会として組織を組み直し、学校への関わりをすすめている。

運営委員会

各学校園に設置

- ・各学校園の課題解決のため、地域と協働で活動が進んでいる。
- ・小学校によっては放課後子供教室の運営も担っている。

学校の周辺から校舎内に、そして教育課程内に地域のマンパワーが注ぎこまれるなど、子供たちの豊かな学びの場が広がっている。

図は、文部科学省が作成したものです。先日、文部科学省生涯学習政策局社会教育課長が奈良市に来られた際に直接話をする機会がありました。その中で、奈良市の「地域で決める学校予算事業」に基づく地域教育協議会の取り組みは、全国の中でも際立った実践として文科省も関心を持っているとおっしゃっていました。中央教育審議会の生涯学習分科会ワーキンググループでも事例が紹介され、7月末には冊子の形で全国に配布される予定です。

◇地域と連携した学び



富雄地区自治連合会の前会長は、「地域は、様々な企業で勤められた方、研究機関で開発に携わっておられた方、外国で勤務されていた方など、多様な人材が住まわられていて、いわば、人材の宝庫といえます。これを活用しない手はないでしょう」と言われています。確かにその通りです。どのように地域の方を取り込んで、力になってもらうかが、工夫のしどころです。今年1月の校長会でも、平城東中学校区を中心に活動されている「理科おもしろ実験教室」の、佐保台小学校での活動を紹介しました。かつて校門から入って学校の整備などをしてくださっていた地域の方が、今は教室の中にまで入って取り組んでくださっています。二名中学校の「寺子屋プロジェクト」では、「地域の子どもは地域のみんなで育てる」という思いから、校区在住の、高校や大学で教鞭をとられていた方にボランティア登録をいただき、コーディネーターとともに学習支援を行っていただいています。「中1数学」を核に、今年度は年間20回の実施予定だそうです。これ以外にも、「夏休み宿題助け隊」、「冬休み宿題助け隊」、また、「夏期学力補充講座支援」のプログラムも準備されている充実ぶりです。

■おわりに

地域を巻き込んだ取組は、校長先生や教頭先生といった、学校のリーダーが前に出て、地域から人材を発掘していくところからはじめなければなりません。もちろん手間はかかりますが、学校が待っているだけでは地域は動いてくれません。「このままでいいや」と思ってしまうのではなく、こちらから積極的なアプローチをしていってほしいと思います。

地域とのネットワークを広げていくことで、子どもの価値観は大きく変わっていきます。若い先生方にとっても良い刺激になるでしょう。子どもたちは、地域コミュニティとのつながりを通じて、自分の見ている世界を広げ、強さと、しなやかさを身につけていくのです。これから出ていく社会で活躍できる大人に育てていくことが、子どもたちへの私達の責務だと考えるのです。だからこそ、先を見通すことが難しく、変化が激しい社会であっても、たくましく生き抜くことができる力を、地域と協力して身に付けさせてください。